
きみのためにできること。

羽根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみのためにできる」と。

【著者名】

Z5805D

【作者名】
羽根

【あらすじ】

森で困っているところをホタルに助けてもらつたねずみ。今度は、そのホタルを助けたいと、ねずみは、いろいろな動物のところに行くが…

「ひむ、動物と虫たちが、仲良く暮らしている森。

ある日、一匹のねずみが、森の奥で遊んでいると、いつの間にか、辺りは真っ暗になっていました。

どっから来たのか、どっちに行けば帰れるのか、わからなくなつて、ねずみは、怖くて泣き出してしまつた。すると

「どうして泣いているの？」

ねずみの前に、一匹のホタルが現れた。

「こんなに、真っ暗じゃ お家に帰れない」

ねずみが言つと、

「じゃあ！ボクについてきて」

ホタルは、ねずみの周りをぐるりと回り、暗闇の方へと飛んで行こうとした。すると、ねずみは

「待つて！こんなに暗いところじゃ、小さなキミを見つけられないよ」

と、泣きそうな声でホタルを呼び止めた。

ホタルは、

「大丈夫！暗くても、ボクが見えるから

と、暗闇の方へと消えて行つた。

ねずみが、ホタルの飛んで行つた方をジッと見ると、小さな明かりが暗闇に一つポツと浮いていた。

「ホタルくん？」

ねずみは、急いでその明かりへと走つた、明かりの主は、やつぱりホタルだった。

「ほら、ボクを見つけられたでしょ

「うん。ホタルくんのお尻り 光るんだね これなら、ぼくでも、ホタルくんについて行ける！」

ねずみは、小さな明かりを頼りに走り、気がつくと、見慣れたドアの前に。

「ぼくのお家だ！帰れたんだ ホタルくんありがとう。」

この日から、ねずみとホタルは、大の仲良しになり、毎日一緒に遊びました。

ある日、いつもの様になずみが川岸にあるホタルの家に行つてみると、ホタルがシクシク泣いていた。

「ホタルくんどうしたの？どうして泣いているの？」

ねずみは、びっくりしてホタルに聞いた。するとホタルは、泣ながら答えた。

「ボクのお尻り、もう光らなくなってしまったんだ。体も重いしきつとボクは死んでしまうんだ」

話終わるとホタルは、またワーッと泣き出してしまった。

「大丈夫！もう泣かないで、今度はぼくがキミを助けるから！」

ねずみは、そう言つと、森へと走つた。

「どうしたらいいんだろう？ぼくに何ができるんだろう？」

そう考えながら走つていると、いつの間にか、夜になつていた。ね

ずみがふと、空を見上げると、星がキラキラ光つっていた。

「あれだ！あれをホタルくんのお尻りにくつつけたら、ホタルくんはまた元気になるかもしねない！」

ねずみは、手を伸ばしてみたが、星には届きません。

「やつぱり、ダメか…そうだ！」

ねずみは、うさぎのところへ行きました。

「ホタルくんが大変なんだ！どうしても、あの星を取りたいの！うさぎさんのその長い耳に登らせてくればきっとあの星に届くと思うんだ」

ねずみは窓にピコンと伸びたうさぎの耳に登り手を伸ばしてみたがやっぱり届きません。

次に、ねずみは、うさぎのところへ行きました。

「ホタルくんが大変なんだ！どうしても、あの星を取りたいの！そうさんの長い鼻に乗せてくればたらきつとあの星に届くと思うんだ」ねずみは空にむかいピンと伸ばしてくれたぞうの鼻先に乗り手を伸ばしてみたがやつぱり届きません。

次に、ねずみは、きりんのところに行きました。

「ホタルくんが大変なんだ！どうしても、あの星を取りたいの！きりんさんの長い首を登らせてくればたらきつとあの星に届くと思うんだ」

ねずみは空にピンと伸びたきりんの首に登り手を伸ばしてみたがやつぱり届きません。

次に、ねずみは、さるのところに行きました。

「ホタルくんが大変なんだ！どうしても、あの星を取りたいの！さるさんがぼくをあの高い木の上に連れて行ってくれたらきつとあの星に届くと思うんだ」

ねずみは、さるの背中につかまり、空にピンと伸びた高い木の上で手を伸ばしてみたがやつぱり届きません。

次に、ねずみは、鳥のところに行きました。

「ホタルくんが大変なんだ！どうしても、あの星を取りたいの！鳥さんが、ぼくを乗せて空まで飛んでくれたらきつとあの星に届くと思うんだ」

ねずみは、鳥の背中に乗り空の上で手を伸ばしてみたがやつぱり届きません。

とうとう朝になってしまいました。ねずみは、がっかりして、ホタルの家に行きました。

「ホタルくん大丈夫？」

「…。」

返事がありせん。ねずみが、家を覗いてみると、ホタルが部屋の隅で倒れていた。

「ホタルくん！ホタルくん！」

ねずみは、何度も何度も、ホタルの体を揺すってみたが、ホタルは

ピクリとも動きません。

「ホタルくん、」めんね。『めんね。ぼくが助けてあげる』と言つたのに…。』

ねずみは、ホタルを、草をしきつめたベッドに寝かせてあげると、急いで、森一番 物知りのゴリラのところに行つた。

「本当にホタルくんは死んでしまったの？ もう、覚えないの？」

ゴリラは、少し困った様に、うなづいて、

「ホタルは、今のわしらには、行く事ができない遠いところに行つてしまつたから、もう、会う事はできな……」と答えた。すると、ねずみは

「ぼくのせいだ！ ぼくが星を取つてこれなかつたから、ホタルくんは、死んでしまつたんだ！ ぼくのせいだ！」

とワンワン泣きだした。そんなねずみに、ゴリラは、首を横に振り、「そうじやない！ お前のせいではないんだよ」と、小さなねずみの肩に手をおき 話を続けた、

「もうすぐ、夏が終わる。それと同時にホタルの命も終わるのだよ。ホタルは冬を越せない、長くは生きられないんだ。だから、お前のせいではないのだよ。」

ゴリラはねずみにもわかる様ゆつくりと言つて聞かせた。

『命があるものは、いつか必ず終わりがくる。』

といつ事を…。

「ぼくは、ホタルくんのために何もしてあげられなかつた」と、泣きじやぐるねずみにゴリラは

「ホタルは、ちゃんとわかつてある。お前が自分の為に、一生懸命になつてくれた事を。きっと、ホタルは嬉しかつたと思つる。」

と、笑つて見せた。

ゴリラの話をジッと聞いていたねずみは、ゴリラの膝に小さな手を置き訪ねた。

「遠いところってどこなの？ぼくは、もう、ホタルくんのために何もしてあげられないの？」

ゴリラは少し考え

「そうだなー、ホタルは、お前が取ろうとした、あの星になつたのかもしけんなー。お前がホタルのためにできる事は、これからも、ずっとホタルと友達でいる事だ。ホタルは、空から、お前を見てくれるだろ？」

その言葉を聞いたねずみは、急に外へと、飛び出し、夜の真っ暗な空を見上げた。

「どの星がホタルくんだろう？あの一番ピカピカ光っているのがホタルくんかな？おーい！ぼくは、ここだよー！ぼく、ホタルくんの事、絶対に忘れないからね。ずっとずっと友達だからね！」

そんな、ねずみの姿を部屋の窓から、ゴリラが優しく見守っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5805d/>

きみのためにできること。

2011年1月27日01時56分発行